

プロレタリア通信 No.14

學生運動に果食う日和見主義
諸分派を粉碎して

—全学連第4回大会のやが世界革命における位置 —

全学連第14回大会は「他友好団体」からの招待でなく
傍聴もなかつたにもかかわらず、衆人の注目のもとに開
かれ、4日間の教諭を展開した。日本に於いて共産主義
者へ自称——もふくれて——が、完全なヘゲモニを握つ
て、いる唯一の大衆組織であり、過去数年間にわたるブル
ジョアジーに対する激熱な斗争によつて、より全戦線
局の先頭に立つて来た全学連に、動評、警察法斗争の中で
既開始された左翼の分化、革命運動指導部の再編成の活動
事が、追り来る新らたな階級斗争の激浪を前にして、最も
尖鋒化にとぎ下さるこれに形で反映したのは全く当然であ
つた。従つて第14回大会における多数の論争は、日本に現
墮ちする革命的潮流のすべての政治的見解がここに凝集
同されて行なわれたのであり、全學連に於けるこの死斗争力
者での本の勝利に終るのには、草に日本学生運動の情勢と
義決するに上まるものでは決つてなく、日本革命運動の展
開に決定的因素となる影響力を与えましたのである。しかし
してこれを総括するものは、後にみると、明らかに口
共産的に存在する口座アーリア運動潮流本に直接に
つらなるものでより、としてまた世界革命にける日本の
しめる特殊な地位の故に、日本学生運動内部におけるヘゲ
モニ一争奪の結果は、我口の吉見革命の展望に直接に重
大な影響を及ぼすものであつた。

の日本文庫院——トリリナ・フルシナヨ・スラーリン本
云ふ事でもなく、ハ圓大會以来「反主流派」の如きを主導し、
全官僚体制を動員して妨害、毀謗活動を展開し、日本文庫は
於にては、左に一二の如き一ミテ四マニ點の因襲禁書等、
われわれの最大の敵打旨と有、たゞは、此の一派である。
注直すベシは、ニシイ派は實は二つの今派の其心較強であ
つて、神戸大、早大（一文堂新派）、鶴齋大、アーリン等の新派
とする、わゆる構造的改良派リトリアノ派、及全文正大學（
（周西大學）植葉口太等を中心とした所風派リマーリン
派ニ、である。本文に於ける新派は去年の一一、一二、
十三大會とは異つて、周西を中心とに、所風派の大聖堂墨が行
われたことであり、今一つの特徴は、もいかめらず大會の
反主流派のヘクモニーをとり最も競う的にしたまゝ、たのは極
だとして構造的改良派である。

二のことは日本文庫院へ從つてまた「日本文庫院のレの室内
分派斗争」の展開の直接の結果である。行く5年大會代争に
分派斗争の展開の直接の結果である。行く5年大會代争に

医学のものに「等々学生の中にある右翼的傾向にのって、政治方針論」の形式論、技術論、對術論で、主流派を攻撃し、若干の中間派とひきつけたものであった。
だが参院選挙の日共の敗北は、日共主流派に甚大な衝

的部品として、これが、たゞひとこと、即ち、この組織の事実で、
に進んで、彼は構造的改良派、五六年後半から「反保守」の理論
リトリトリー主義者を主導する。我々分裂し、五七年に至つて、学
生運動内に、おけり、この組織が分裂活動に入つたことは衆知の事実で
ある。日本、海内、斗争においては、所感派のスターリン主義・民
族主義に対立して、トリアノの構造的改良と、社会主義革命を以
つて進み出、翌年九月の七回党大会に於いては、「社会主義革命」
を主張する他、諸派を連合して「社会主義革命派」として大会の主
導校玄蕃大に参入した。だが、この一派の組織方針にも現れた白
色革命主義は、胡亂な政治の結成を怠つたが故に、大会に於いては論
争に於いては勝つをせざり、人事においては完敗し、以後の宮本＝香
川の幹部は、純粹官僚体制の壁口を許したものである。この構造的改良
派の選内斗争における敗北は、彼らの強硬を喪失させ、その表現が
全盛期一二・三回大会における彼らの姿とは違つたのである。
だが渠の左翼たるわれわれが、分化と分离をあくすめ、組織的
にモ決別する方向を明らかにした時、日本は内戦を既化した。日
本へ回大會をひかえた党内斗争化の帮助は、党内左派、議会派へ
構造的改良派はその最大のもので、そして、眞の左翼たるわれわれ
に対する攻撃に、このだけ功績をあげたかによつて、その党内斗争を
有利に展開せよとしたとする立場を取つてせられたのである。

「スター・リン主義—宮本らの民族、民主主義革命派リ代々木主
流派

の国際的影響力は倍加されるだろう。そしてこれらすべては国際革命運動の中にスチーリン主義から解放された世界革命と目指す部分が、はじめてソヴィエト官僚制打忤ともそのフルームに含むことによる。世界プロレタリア革命の開始を現実的展望とすることができるのだ。

約時代木スター・リン主義者との死斗にいよいよわれに一回回大会に
おける我々の勝利に特殊な困難を加えたエゼソード的因素に、ト
ニッキードラマティストの暗躍があつた。オ四インター日本支部準
々として発足しながら五八八年七月に三つに分裂して今に至りて以
てはウキズム組織、革命的資本主義者同盟と曰く族主義共産党がそ
くあり、特に一三回大會に於て、金学連の中核部を掌握した革共
との斗争は、代々木打仆の斗争の過程で我々が果さねばならぬ一

の課題であった。だが結論的に云うならば西に拠点をもつたこれらの流派の活動は、色々との争闘の敗北のみに結果し、京都において、大阪において、代々木スターイン主義者に道を開いて学生組織から追放されたのである。

革共同じ我々の間には、去年の一月以来激しい論争の過程があった。各界革命の団體組織成の活動に於けるオフィンターの評価、オフィンターの基本綱領である過渡的綱領の評価、各界革命の過渡的ノンザイエト官僚制打汰の課題をどうとらえるか、等々めぐして統じてトロッキーの活動とその理論と無批判的に、教条主義的に進歩するか又は、それを批判的にとらえ克服しつゝ前进するかをめぐって多くの論争が展開された。だがこの論争は四、五月の学生運動の実践の方針の提起とその物質化の過程で実践的結論を与えた。即ち労働運動の方針における合理化反対斗争の、安保斗争と対置しての強調、政治斗争の軽視、労働運動が危急的状態はあるが景氣上昇をどうえて改良の斗争が特殊に重要な――という労働運動の現実と知らぬナンセンスな議論。

「この理論的感覚は只に実践的にも取扱し、代々木に道を開いて終つたのである。我々は、この期間、特に東都、東京において斗争の組織のために彼等との激しい論争を行わねばならなかつたが、今や、その中間主義的性格の故に学生運動中にその有力な影響力とすでに失つた革共との斗争に終止符をうち、我々の主要な不復戴天の敵代々木スターイン主義者との斗争に全力を尽くさねばならぬ。」我々は四・五斗争、社学同大会においては、彼等と並びて現われた右翼的見解を、「新たな日和見主義として非妥協的に斗いつゝ斗争を通じて子たが、全学連大会においては、代々木の全学連頑張工作を討伐するため、一定の政治的姿勢を彼等との間に行つた。しかし我々は、もはや彼等が「反スターイン主義」という複数か、何といふ理由で幻想を抱いてはならぬ。全学連大会、社学同大会における討論から結論下されることは、革共同が左翼的傾面を被つた学生運動にみける右翼的潮流の代弁者としての位置に転落したところであり、更に直率的には社学同「左」の激反対派宣言、全学連人事問題に示された如く、全学連を中心とした革命的學生運動の惣乱者としての姿をあらわした事実である。我々は今后、代々木共産党的尊劣な陰謀を粉碎するためにも、革命的學生運動の前進を勝取る爲に、新たに日和見主義＝革共に対する非妥協的な斗争とづけ、すでにサークル的存在になつてゐる彼らと最終的に学生戦線から放逐しなければならない。

(乙)トロツキードグマティズムのオニの流派として田陳吉義英彦等
（旧）トロツキスト同志会があるが、二の一派はトロツキズムの最
も田和見的部品を極限まで発展させる一によってその破産を自ら
証明し、学生戦線に於いても最右翼にまで到達した。彼等はガ四イ
ンターオ五回大会決定に忠実に従つて社会党への加入宣誓をとどり、
学生党員は全国社会青年部に入つて野合とばしひとげ学生対策部に
もぐり込んじ、学生運動民主化協議会によるものを結成して社会党の
金を使つて学生の最も右翼的部品に依頼して分裂活動に狂奔するに
至つた。だが、そのあまりにも徹底した左派主義と右翼成績、全国

的政局斗争の否定は全学連大会においても代々不派の支持から勝ちとされた。何もわからぬ中間部分を二十字余ど「たにすやなが」た。トロッキードグマティストの平板で固くて小さくほど子」だ。體の悪らしく先と典型的に示すと云える。

以上の如き諸流派の中で我々の不載天の敵は代々本共産党をあげて他にはない。我々はこの期間、各地で大衆斗争の先頭に立ちながら、この右翼妥和見主義と非協約的に斗い、一回国大会に於ては、学生運動のボリュームキ的路線を貫いた。だが、我々は革共同という狹穀物の存在等により、いくつかの地盤で、特に、京都、大阪、そして東京に於いて敗北区画した事を知らねばならぬ。我々にとって明らかなことは、二の代々本スターイン主義との斗争には、同盟の確固とした確立、その下での大衆斗争の展開のみが勝利の保障であり、これなしに、即ち学生運動における完全な勝利なしには、我國の世界革命のためのあらゆる活動も空詰に終るであろうことをである。

代々不スターイン主義者は今大会での追出に力を得て、六月の斗争を同盟の完全なへびぞ二ーの下に全国で徹底的に展開すること、これこそが現在の我々の唯一の真眉の任務である。時大会を要求し、二ーで完全に奮闘することを策していることは明白である。

六月の斗いは我々の全事業に決定的影響を及ぼすであろう。六月の斗争を同盟の完全なへびぞ二ーの下に全国で徹底的に展開すること、これこそが現在の我々の唯一の真眉の任務である。そうしてそのため、その斗いの中に、全国的に同盟を確立せよ、これが斗いの勝利的遂行の唯一の保障である。

共産主義者同盟をあらゆる工場、学校、等々に組織せよ。

難、誤りに対する清算主義的評価、藝術性なしの自己批判とその裏返しの学生の意識状況に追随した行動方針の提起という七段化。「労働者階級の斗争が後退し学生感課の全体的停滞がある問題」面では「全体として斗争体制の整備」が「主導は誤認」になつてゐる今、「後退期の学生運動に一権主義的斗争指針を適用すること」に反対し、「後退期に劣ける体制整備への手段」として「学園における学生の权利・生活の為の斗争」の採用と断じて強調する。(『社学固丘契反対義理成宣言』)こうした学生運動論の実践的結論は、

①「それは上昇局面における藝術だ」「一権主義」としてストライキ・その他の闘争な、斷固たる斗争形態となることに反対する。

②学生運動の転換の大衆化、イデオロギー活動の重要性を口で強調しながら、明確な方針を提起しその下に大衆斗争を組織することを教諭する。一例えは学生大会でいかに斗つか、安保を阻止するために何が出来かと語らうのではなく「学生運動整備論」を長々と述べ、並。

③後退期と密接主義的、固定的に現状を肯定し、「体制整備との心臓を強調する人同時に学園斗争、改良の斗争味の強調」として、このよくな学生運動の方針によつて構築された部分に於いて、「平和ヒ民主主義」のスローガンの下にエネルギッシュに大衆を鼓舞しようとする構造的改良論、あるいは至高主義と徹底して、大衆に追随する所感本に大衆を養われ、自治会の権限を尊重されたたのは当然の結果であつた。全学連大会に於いても、この春の人々の講演集、あるいは著言のはどんなに全て近代日本に最良のアカデミックの材料を与えたことは、見た通りである。中向の「運動であり民主主義的運動としてある学生運動と革命的前進」が、革命することによってかかとる全革命運動中の巨大な精神的革命的理